

平成30年9月14日（金）付で「中日新聞」に掲載されたものです。中日新聞社のご厚意により転載します。



あなたに伝える

循環する時間というものもある。こちらの方が僕らの美的経験、芸術経験にふさわしい時間なのではないか。太陽の出入り、月の満ち欠け、満潮・干潮…。

梅雨の七夕。冬真つた中の正月。満月かどうかわからない十五夜お月さま。季節感が豊かな日本文化のほずなのに、伝統は崩がずれている。原因は明治維新で旧暦（太陰太陽暦）を無理やり新暦（太陽暦）に変えたことにある。日本人の季節感を取り戻すため、月の動きを大切にすると旧暦を復権させ、新暦との併用を呼びかけているのが広島大名誉教授の美学者金田晋さん（67）だ。「旧暦の勧め」を聞いた。（増村光俊）

金田 晋 広島大名譽教授

季節感がよく似合う風土だ。旧暦が太陽暦のずれを調整するために古代人は十九年に七回うるう月を入れた。両者の誤差は二時間程度。この方式は提案者の古代アテネの数学者の名前をとって「メトン周期」と呼ばれているが、中国にも殷時代のすでに知られており、紀元前後には「章」とよばれて定式化されている。日本へ最初に入ってきた暦にはすでに「章」が組み込まれていた。古代バビロニアにもそうだった考え方はあったという。古代人の知恵の深さには驚かされる。

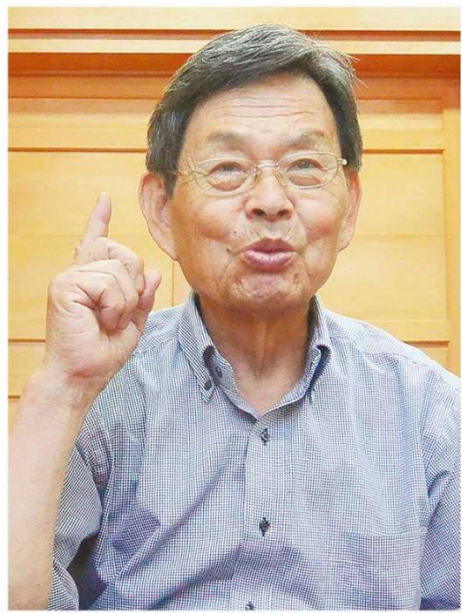
僕は半世紀以上美学を専攻して、美術や文芸に親しんできた。すべった作品には命のリズムが感じられる。リズムとは時間の表現だ。ただ、現代の時間表現の中で起ったある出来事、例えばキリスト誕生を起点として、終末に向かって一直線に進んでいく。後戻りはできない。その出来事以前は逆向き（紀元前〇〇年など）に数えていく。だから進歩や進化、発展はキーワードになる。このような思想が広まっていくのは西暦（グレゴリオ暦）が一般的で、西暦のキリスト教社会でも十七世紀以降とされる。この考えだと文明の進歩は加速度的に進むが、滅亡もそれに合わせて早まる。それは耐えられないと思った。

これとは別に循環する時間というものもある。こちらの方が僕らの美的経験、芸術経験にふさわしい時間なのではないか。太陽の出入り、月の満ち欠け、満潮・干潮…。

五月五日のこどもの日のこのほり。今ではゴールデンウィークの五月晴れのキヤッチコピーによく使われる。でも本来、夏の季節。長い梅雨（五月雨）と梅雨の間の短い晴れ間、湿度が多く、暑くてすくく蒸し蒸しする。空に水のように蒸気が甘く、自分が水の底にいても涼気が感じられる。毎年の時期に繰り返される。七夕も今年は八月十七日が本来の日だった。季節は秋で、旧暦の七夕は上弦の月。夜空を見上げると、東の空にわし座の一等星アルタイル（心臓）とこ座の一等星ベガ（織り姫）が輝いている。はくちよう座の一等星デネブ（カササギの仲立若で、両者は一年一度の逢瀬を楽しむ）だが月は満ち足りて沈む。そのときまで見えていなかった天の川が突然現れる。二人の間を渡ってしまふ。こうした天体ショーも七夕の話は出来上がった。東アジア独特の伝説、七夕は本来旧暦のもの。新暦の七月七日では梅雨の最中。星空を期待できない。九月九日菊の節句にいわれますが、菊はまだ露地では咲いていないです。地。

旧暦とは直接の関係はないのですが、暦との関係で、元号についてはどうお考えですか。来年五月には新しい元号になる予定で、確かに直接の関係はありません。ただ、元号には国を治めるとき、この一年つがなく治めていく。次の一年もつがなく治めていく。この循環の考えが背景にあると感じる。言えるのは、時間は一本化するようなものではなく、もっと豊かなものではないか。明治にはじまる一世一元の制以後、元号は天皇の治世の表示を除けば、西暦の情報もなにも感じられない。これは中国の明朝から始まった制度で、天皇を権威づけるため、中国の皇帝制度を見習ったものでしょう。かつてはもっと臨機応変だったよう。平安時代から江戸時代まで千余年間に二百回ほど改元された。例えば書くときに西暦だと算用数字が、旧暦だと漢数字がしゅりきますよね。同様に、充実した時間の再生のため、新しい元号が旧暦と結び付けばいい。など、旧暦に記憶された伝統と文化、僕らが日々体験している季節感が結びつくようになればいい、と思います。

旧暦と併用なら四季と結び付く



写真・増村光俊

まづ旧暦はどのような暦ですか。地球が太陽を回る公転を基準にするのが太陽暦、月（太陰）が地球をまわる公転を基準にするのが太陰太陽暦。前者は一年約三六五・二五で、後者は一年約三九・五。これに十二をかける（一年三百五十四）。両者の間では一年間で十一日程度のずれがある。それを調整したのが太陰太陽暦。農業に役立つ暦でかつては世界でも一般的だった。今旧暦と呼ばれている暦はその日本版で、二天保暦（とよはれ）で、世界で一番正確な太陰太陽暦といわれている。「旧暦」というと、今ではまったく使われていない暦であるかのように思われるが、農業漁業や茶道など伝統文化の世界では生きています。制度としての暦は六世紀に中国から日本に導入された。しかし、経験則としての暦意識はずっと昔からあったはず。約五千年前の縄文時代中期には既に粟の栽培が行われていた。秋になると実を収穫し、保存して一年を通して食べていた。定期的に肥料も施していた。定規が実がもたに数年かかるから、そういった時間（長さ）も視野にあった。木にならぬ建築材として使われ、伐採後に苗木が植えられた。中緯度でモンスン地帯のこの列島は「日本」という名がつけられるずっと以前から、四

あなた・すずむ 1938年7月15日生まれ。堺市出身。大阪府立三國丘高校から東京文学部へ。69年から広島大に文学総合科学部教授などを歴任。2000年に退官、名誉教授に。山口県下関市の東亜大総合人間・文化学部の初代学部長になる。現在は広島県呉市の福蘭閣美術館の名誉館長を務める。専門は美学。金田さんは「哲学、

倫理学、美学を分けるのは日本人だけ。世界的には三者は不可分のもの」と話す。現象学、実存哲学を研究するうちに、西暦のような直線的な時間の流れよりも循環的な時間の方が豊かだと気づき、暦の問題に取り組むようになった。日本の伝統文化を理解するためには旧暦が適していると考え、新暦との併用を呼びかけるようになった。

十年以上前になるが中国で一年間生活し、中国人の生活に旧暦がいまだに生きていて驚いた。当初は「やはり遅れているのか」と考えたが、一年後には「旧暦の方が人間の実感に合っている」と思うようになった。正月より、春が目の前に来ている春節（旧正月）の方が新しい。

一年が始まる気がする。帰国してからも新暦一本やりの生活に違和感を感じた。そのうちに、金田さんについて知った。多様性を重んじた考えなの。その考えに凝り固まるより、さまざまな思想が入り乱れている社会の方が住みやすくて深い。暦の問題に限らないと思う。